

菱肥会インド農業視察 - part1 -

～「Big Haat社」訪問とインド・ワイナリー視察～

11月3日～9日に菱肥会会員8名、賛助会員4名、当社2名の14名で菱肥会インド農業視察を行った。11月4日バンガルールにある「Big Haat社」を訪問した。「Big Haat社」創業者の一人で経営陣でもあるSachin Nandwana氏（米Honeywell社出身のエンジニア）より会社の説明を受けた。

「Big Haat社」は2015年に設立された種子・肥料・農薬などの生産資材や技術サービスを提供するインド初の農業プラットフォームプロバイダーである。約400万農家のデータを保有し、「インドの農家の未来を変える」ことを目指している。



Big Haat社社員と記念撮影（2列目左から3人目がSachin Nandwana氏）

スマホを利用したマーケティングと栽培技術フォローに長けており、直接的な競合は無いと言われている企業である。「Big Haat社」のプラットフォームを使えば、「Big Haat社」と農家が会話できるようになり、農家は生産コストが下がり、収入が増え、様々な問題解決ができるアプリを構築して今にいたっている。日本ではSNSを利用して商品説明をしていたり、病気の判断をしているが、「Big Haat社」は農家が作った生産物をどこに販売すれば収入アップにつながるかまで情報を提供している。

日本の農家のスマホ保有率も高いと思われる。インドの「Big Haat社」のように、農家が欲している情報提供をすることで生産資材の販売に結びつける形を日本でどのようにすればいいか示唆する視察であった。午後からはバンガルールにあるティブ・スルタン宮殿などを見学。インドの歴史の奥深さを感じた。

翌日はバンガルール北部のナンディヒルに1988年設立された「次世代亜熱帯ワイン」を目指しているインド屈指のワイナリー「GROVER ZAMPA社」のグローバーヴィンヤーズを訪問。

インドではインダス文明の頃にペルシャからワイン作りが伝わったが、20世紀に入り害虫被害やお酒の厳しい法規制により一時衰退した。しかし、「GROVER ZAMPA社」が1988年にワイナリーを設立し新たな「インドワイン」のページを開いた。日本人女性審査員だけで選ぶ国際的なワインアワード「サクラアワード」で毎年数々の賞を受賞し、進化を続けている。



GROVERZAMP社 お勧めワイン

400エーカーのブドウ園を持ち、生産量の20%は輸出している。アヌラック氏よりインドワインの製造工程とワインのテイस्टィングの説明を受け、インドワイン6本のテイस्टィングをし、色や風味の違いなどインドワインのすばらしさを知り、今後のインドワインの発展を感じた視察であった。

バンガルールではインドらしさを余り感じることはなかったが、アグラ、デリーと移動し、混沌としたインドを経験することになった。（次号に続く）

～農業と景観～

新規事業開発室では関係各社皆様にお力添えいただきまして今年も多くの取り組みを進めることが出来ました。皆様ありがとうございました。

当室では「環境に配慮した持続可能な農業経営」をコンセプトに本年も課題検証に取り組んで参りました。活動を振り返ってみますと、北海道では水稲のオーガニック生産手法を基本にして温室効果ガス（メタン）抑制のための中干しの運用、高機能バイオ炭を起用した育苗から収穫までの資材効果の検証、北海道では導入が進んでいない水田のペーパーマルチによる除草効果の検証、未利用有機物原料を用いた低コスト有機JAS肥料銘柄と施用技術の検証などを通じ多くの貴重なデータが蓄積されました。また、東北地方では環境保全農産物に係る商材の検証や、被覆肥料より排出されるマイクロプラスチックの軽減に向けたプラスチック被覆を使用しない肥料の実証試験を実施し、被覆肥料銘柄に遜色ない結果を得ることが出来ました。



美瑛町「新栄の丘」

いまこの記事を書きながら、今年収集した多くのデータを取り纏めているのですが、データからは素晴らしい可能性を感じる結果から、まだまだ多くの課題を含む結果まで引き続き多様な視点から取り組みを進めて行く必要を感じています。

ところで、これら各地域での活動を通じてふと農村の景色を見ると、その農業景観の素晴らしさに目を奪われることがありました。宮城県では日本農業遺産としての大崎耕土、岩手県では農水省農村景観に係る事例集より一関市の歴史に配慮した水田景観、奥州市の屋敷林と水田が調和した散居集落景観、北海道では日本で最も美しい村連合の美瑛町丘の風景などなど。調査作業中は田んぼから田んぼへ忙しく移動し、データ計測中は田んぼの中に入って稲のみ見ているだけでしたが、もう少し異なる視点からも農業を見ておくべきだったのかと今になって思うところです。農水省のホームページを見ると、農業生産に関わる環境対策が先に目に入りますが、それ以外にも農村景観への配慮、生態系への配慮についても農業に期待されていることが分かります。現在の農業経営環境は、耕地の大規模化、効率化を求められ見落としがちな景観や生態系ですが、2000年に渡る稲作文化を持つ日本の文化的な環境風景として心に留めたいと思います。



抜穂祭

最後に、北海道オーガニック米プロジェクトの生産技術を用いて設けられました令和六年度新嘗祭献穀圃場にて、皇居新嘗祭に献上する米を収穫する「抜穂祭」が9月20日美瑛町で行われました。式典の様子を掲載させていただきます。（新規事業開発室）

急に冷え込んだり、暖かかったりで身体が疲れてしまいますね。睡眠をたっぷり摂りましょう。

編集事務局：田口、山内

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp

URL <http://www.mcagri.jp>